

どちらが似ている

1. キセルガイ

煙管と書いてキセルと読めるのはシニア世代、形が想像できるのも同世代でしょう。カタツムリの仲間で、〇〇マイマイと呼ばれるものと××ガイと呼ばれるものがあります。一般的にはカタツムリとイメージされている型のものがマイマイとつけられ、螺塔が高かったりずんぐり型にカイがついているようです。キセルガイはその形態から名付けられました。全国には多くの種類があり、分類の難しいグループです。

打吹山にいるキセルガイは3種で、多いのは成体で殻高4cm近くになるナミギセルと2cmのチビギセルです。巻き方は左巻きで、成体になると殻口が厚くなり外に反りキセルの火皿のようになります。

乾燥時はよく朽ちた倒木の樹皮下や材の中、樹の根元の落ち葉の下あるいは石の隙間などに隠れています。雨が降った後に見回ると表面に出ていますので、たやすく見つけることができます。しかし、6月の梅雨の頃よりも9月の雨後の方が出会う機会が多いようです。

陸上競技場下の石崖には隙間にたくさん生息していましたが、近年わずかとなってしまいました。移動力も弱く、環境変化の影響を受けやすいのでしょう。陸生のヒメボタルやオオマドボタルの餌ともなりますので多難な生き物です。



左：ナミギセル幼体
中：ナミギセル成体
右：チビギセル成体



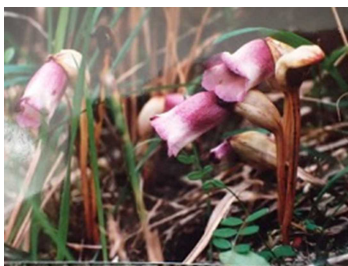
ナミギセル

2. ナンバンギゼル

南蛮の煙管の意味であり、パイプの形状をしているという名称です。この形状は花柄と花からなるもので、茎は見えていません。花柄を持って引っ張ると、硬い肉質の塊がついて抜けます。

この肉質の塊が宿主の根にまとわりつき栄養を吸収している寄生植物です。全く光合成をしないでススキやミョウガの根に寄生し栄養を奪い取るため小さい株のススキでは弱ってしまいます。大きな株のススキでは同じ場所からたくさんの花柄を立て、長い場合は30cmくらいにまでなるものがあります。花色は全体が濃い紫の個体や花被の中央に白い部分の多い個体など変異がありますが、打吹山のものは後者です。

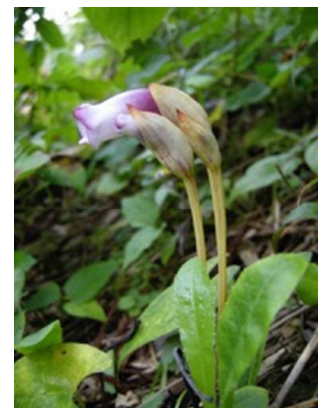
打吹山では多くありません。ススキの生育している場所は草地でなければなりません。陸上競技場や長谷寺周辺、峠の展望台からみどり町にか



ナンバンギセル

けてのススキで確認しています。毎年同じ場所に出てきますが、多年生ではなく、種子が

同じ株に落ちているのです。打吹山のミョウガでは見ていません。昭和の30年代、倉吉西高の生物部がナンバンギセルの種子がどうやって宿主の根にたどり着くのか研究していましたが、そのしくみは解明されませんでした。最近になって宿主の根が分泌する微量のストリゴラクトンという植物ホルモンをたどっていくことがわかりました。



ナンバンギセル